

2025年は6人の市民の方から寄稿いただきました。
そのうち2編をご紹介します。

私は戦争体験者

村山 優子さん 91歳

私の戦争体験は台湾でした。引き揚げ者です。日本本土の戦況と違っていかかもしれませんが、戦争の恐ろしさは同じだと思います。

日本がハワイを攻撃したのを皮切りに、第2次世界大戦が始まりました。その時、私は台湾の国民学校の1年生でした（父は父の仕事の関係で台湾へ渡り、私はそこで生まれました）。初めのうちは「勝った勝った」と提灯行列をして喜んでいましたが、その後の状況の悪化はずっと知らされませんでした。家の近くに特攻隊の飛行場※があり、近くの日本人の家には23人の予科練生が下宿していました。私の家にも2人が出入りしていました。多分、17、18の青年だったと思います。「お兄ちゃん お兄ちゃん」と呼んで遊んで貰いました。滞在期間は覚えていませんが、その後、戦死したと思います。

鹿児島県の知覧町には同じ年代の人の遺書が展示されています。遺書を書く時はどんな気持ちだったのか、辛いです。

残っている者は、国（台湾）を守らなければなりません。それを「銃後の守り」と言いました。夜、敵の飛行機に見つからないように電球に黒い布を被せたり、窓のガラスが割れないように紙のテープを×点に貼ったり、火を消す訓練は小さなバケツに水を入れて次々に消すバケツリレーでした。他にも、チャーチル（英国）、ルーズベルト（米国）のわら人形をめぐって竹槍で突くという訓練もさせられました。このような粗末なものが国の方針だったのです。滑稽としか言いようがありません。

防空座布^{ぼうくわふ}には、小さい布に住所、氏名、親の名前、血液型を書いて縫いつけて肌身離さず持っていました。いつ攻められるか分からないので、同じ洋服を着て身構えていました。

父は台湾で赤紙召集、千人針のタオルを持って出征しました。

戦争が熾烈になり、私たちは（台湾の）山奥へ疎開（逃げる）しなければならなくなりました。疎開する時も突然山間から敵機が現れるというとても恐い目にありました。

延々と4年つづいた戦争は昭和20年8月15日で終わりました。それからは日本人は殺されると言う噂が飛び交い、慌てて翌昭和21年3月末に着の身着のままで日本に戻りました。

折角苦勞して日本に帰ってきたのに、帰ってきてすぐに父は病気になる、食べるものもなく薬もなく、肺病で42歳で亡くなりました。その2年後には「パス」と「ストレプトマイシン」という肺の薬がで、今では結核で亡くなる人は殆どいないようです。

残された3人の子供（6年生、3年生、2才）は、みんな母が育ててくれました。すごい苦勞だったと思います。いくら感謝しても足りません。書き進めていると母をしきりに想い出します。

25年前、夫とハワイに旅行に行きました。（夫は20年前に亡くなりました）その時、真珠湾にも行きましたが、この時はほんとうに日本人として恥ずかしく、済まない気持ちでいっぱいになりました。

世界のあちこちで争っている国があります。その国の指導者が考えを改めて世界が平和になりますように祈っています。

※台湾にも特攻隊の出撃基地がいくつか存在しました。特攻作戦は主に南九州の基地から行われましたが、台湾にも宜蘭（ギラン）、花蓮（フアリエン）、澎湖諸島の望安などに旧日本軍の飛行場跡や関連施設が残っており、特攻隊員たちの出撃や壮行の場となりました。



戦争体験談

斉藤 美代子さん 91歳

私は、母の実家がある三田の相野（それまでは大阪の十三に住んでいました）に3つ年下の弟と疎開していました。そこで、小学6年生の時に終戦になりました。その直前までは、爆弾の恐ろしさの続く日々でした。

終戦と云う言葉がラジオから流れた時、日本が敗けたと

云う悲しみより、家族が電気をつけて笑えると思うとほっとしました。でも母は泣いていました。戦争は人の心をむしばみ、意味のないことだと思い、大人になったらこの痛みを生かして戦争の無い平和な世界に力を注いでいこうと決めました。

疎開先での爆弾、B29、防空壕、防空頭布^{ぼうくわふ}の思い出は今も頭から抜けません。

また、兄が出征する時の悲しみ、みかん箱の上に立ち、近所の人々に見送られる姿を見て、妹の私としては死を覚悟をして見送りました。それから暫くして、伊丹にある陸軍の千僧兵営に配属された兄に面会に行くと、上司の命令に従い、靴ずれのため足をひきずり、泣きながら歩いている兄がいました。その後、兄は目が悪くなり兵隊として役に立たない人間となり除隊され哀れな姿で帰ってきました。

「ああ、よかったね」と私は兄を抱きしめました。近所の知人は特攻隊で飛行機にのろうとしたが、飛行機が故障して助かったと聞きました。お国のために命を捧げないと駄目な人間と云われていましたが、命の尊さが私には国を大切にすることだと信じていました。命あってこそ。

戦後、川西の花屋敷に住居を構えることになりました。近所の大きな家にはアメリカ力進駐軍が占領して住んでいました。そこで、よくバナナを食べているアメリカ人を見かけました。私も食べたいと思いました。でもなぜかバナナは家にはありませんでした。

その後も兄は母の世話をよくしてくれ、私は安心して生活出来ました。兄の息子たちも立派に成人し世の中で活躍しています。現在、私は川西で、さやかコーラスに参加させてもらっています。やなせたかしさん作詞の悲しい、さみしい曲をうたっています。戦地へ行き、命を絶たれた方、残された人々の悲しみが伝わってきます。戦争の悲しみは、現在も続いています。心の傷跡は消えることはありません。この悲しみをパワーに変えて、平和な世界でありたいと祈り続けています。

卒寿を越えた今も「長崎の鐘」藤山一郎さんのうたわれた曲を下手ですがピアノで弾きながら、平和の鳩を飛ばしています。

